

自己評価報告書(最終報告)

コース等名

自然系コース(数学)

記載責任者

秋田 美代

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 大学院の学生定員の充足

貴専攻・コースにおける過去5年間の大学院学生定員充足状況を分析・検証し、達成目標を設定するとともに、どのような具体的方策を立てて、目標達成に向けて取り組んでいくかを示して欲しい。

1. 目標・計画

大学院定員の90%以上の入学生を確保するため、以下の方策を過去5年間実施してきた結果、これまで目標が達成されてきている。従って、本年度もこの方策を継続して実施する。

1. コース各員の他大学での知り合いに対し、直接訪問もしくは電話・メールで、学生への受験の勧誘をしてもらうよう依頼する。
2. コース紹介・受験勧誘のパンフレットを作成し、全国の教育学部、理学部、さらに長期履修学生の受験も期待し工学部へ送付する。また、教職に就いている卒業生や算数数学教育学会において積極的に活動している現職教諭にも送付し勧誘する。
3. 鳴門教育大学学校数学研究会の機関誌「学校数学研究」の一部を借りて、大学院の様子を紹介し広報を行う。
4. 教員採用試験で不合格となった在學生に大学院の受験を勧める。
5. ホームページ上でコースの魅力を紹介することで、受験意欲をそそり宣伝効果を上げる。

2. 点検・評価

自然系全体の定員は20名であるが、自然系コース(数学)には15名が入学し、目標を大きく上回る入学生を確保することができた。

1. コース各員が、岡山理科大学、徳島大学総合科学部・工学部、四国大学生生活科学部、高知県・兵庫県の教育委員会・学校現場等の知り合いに対し、直接訪問もしくは電話・メールで、学生・現職教員の本学受験に対する勧誘をってもらうよう依頼した。また、本学の卒業生に対する勧誘も行った。
2. コース紹介・受験勧誘のパンフレットを作成し、それらを全国の教育学部の数学教室、理学部、さらに長期履修学生の受験を期待して工学部へ、願書提出期間の1ヶ月前に送付した。その結果、入学を希望する学生からの問い合わせを複数回受け、学外から15名の入学者を得ることができた。
3. コースが中心になって組織された研究会である鳴門教育大学学校数学研究会の機関誌「学校数学研究」の一部を借りて大学院の様子を紹介し、大学院進学への意欲を高めるようにした。
4. 教員採用試験で不合格となった在學生に大学院の受験を勧めた結果、2名が受験した。
5. 受験意欲をそそり宣伝効果を上げるよう、ホームページ上でコースの魅力を紹介し、受験意欲をそそるように努めた。さらに、次年度に向けて、魅力的なホームページをどのようにして作成するかについて、コース会議で検討した。

I-2. 学生支援の取り組み

学生の卒業時・修了時における「質」保証のためには、常日頃から学生に対する支援を推進していくことが必要である。

貴専攻・コースにおけるこれまでの学生支援の取り組み状況を分析・把握し、本年度どのような学生支援の取り組みを行うか、具体的な方策を示して欲しい。

1. 目標・計画

学生支援のために、これまで以下の取り組みを行ってきたが、いずれも有効であったと考えている。よって、本年も、この取り組みを継続する。

1. コースの学生対象に教採対策塾を開く。
2. 各教員が折に触れ、自分の研究の一端や、興味を引かれた事柄を学生にかみ砕いて話すことにより、学生とのコミュニケーションを図ると共に、学生と共に知の集団としての大学の構築を目指す。
3. 卒業・修士論文の指導および進路・学生生活に関して、指導教員以外の教員の指導も受けることができるようコースで工夫する。

2. 点検・評価

学生支援のために、以下の方策を実施した。

1. コースの学生対象に教採対策塾を開いた。多くの学部生・大学院生の参加があり、学部生6人と大学院生2人が公立学校・私立学校に正規に採用された。
2. 学生が教員の研究室に気軽に訪ねることができる雰囲気をつくるため、各教員が折に触れ学生に学習や研究についての話をした。学生が研究室を訪れた機会には、自分の研究分野、さらに幅広い内容について話をし、学ぶことの素晴らしさを伝えた。これらの活動により、コース各員が学生と共に知の集団としての大学の構築が出来るように努めた。
3. コースの各員が日常的に学部生・大学院生とのコミュニケーションを図った。学部生・大学院生とも卒業・修士論文の指導及び進路・学習生活に関して、自分の指導教員だけではなく、他の教員のもとに相談に訪れた。また、合同ゼミを実施し、指導教員以外の指導が受けられる機会を設けた。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

1. 学生同士が協力しまた互いに競い合う雰囲気を作り出すよう努めるなど、各学生が自ら積極的に学生生活を送れるよう指導を工夫する。
2. 各教員が折に触れ、自分の研究の一端や、興味を引かれた事柄を学生にかみ砕いて話すことにより、学生とのコミュニケーションを図ると共に、学生と共に知の集団としての大学の構築を目指す。
3. 各自授業改善の取り組みを行う。
4. 卒業・修士論文の指導および進路・学生生活に関して、指導教員以外の教員の指導も受けることができるようコースで工夫する。

2. 点検・評価

1. コース会議等で教員が学生の学習・生活状況に関する情報を交換し合い、十分な理解のもと指導が出来るようにした。クラス担当教員・指導教員が中心となり、学生が「教員を目指すという共通の目的意識をもって同じ場所で学んでいる」という自覚がもてるように指導を行った。また、教採対策塾においては、学生が互いに協力しながらも競争意識をもって学べるような雰囲気をつくるように努めた。また、希望者に対しては、集団面接、模擬授業等の練習を行い、学生が教員としての自己を確立するための手助けを行った。
2. 学生が教員の研究室に気軽に訪ねることができる雰囲気をつくるため、各教員が折に触れ学生に学習や研究についての話をした。学生が研究室を訪れた機会には、自分の研究分野、さらに幅広い内容について話をし、学ぶことの素晴らしさを伝えた。これらの活動により、コース各員が学生と共に知の集団としての大学の構築が出来るように努めた。
3. コース各員が授業改善の取り組みを行い、内容・指導方法の工夫に努めた。具体的には、授業内容の体系化を図るとともに、学生が主体的に参加できるように、毎授業時間の一部を学生の主体的発表に当てた。また、学期の途中で授業の理解度を問うアンケートや小テストを実施し、結果に応じて追加説明等を行い、学生の理解の深化を図った。
4. コースの各員が日常的に学生とのコミュニケーションを図った。学部生・大学院生とも卒業・修士論文の指導及び進路・学習生活に関して、自分の指導教員だけではなく、他の教員のもとに相談に訪れた。また、合同ゼミを実施し、指導教員以外の指導が受けられる機会を設けた。

II-2. 研究

1. 目標・計画

1. 研究活動が大学教員としての使命であるという共通の意識を堅持し、それぞれの研究を互いに尊重し、出来るだけ公平に雑事に拘束されず研究活動が推進できるよう協力体制をとる。
2. 科学研究費補助金の申請は全員が行い、出来るだけ多くの採用が得られるよう努力する。

2. 点検・評価

1. それぞれの研究を互いに尊重し、業務を出来るだけ公平に分担して助け合うことにより、時間や雑務に拘束されずに研究活動が推進できることを目指した。
2. 平成24年度の科学研究費補助金の申請は、継続の者を除く全員が行った。平成23年度は、研究代表者・研究分担者として3件を獲得した。

II-3. 大学運営

1. 目標・計画

1. 各自委員として学内の各種会議に出席し、職務を遂行する。授業、出張等で出席が不可能な場合にはコース構成員で協力し、代理としてその役目を助ける。

2. 点検・評価

1. 各自、委員として学内の各種会議に出席し、職務を果たした。授業、出張等で出席が不可能な場合にはコース構成員で協力し、代理としてその役目を助けた。

II-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

1. 附属小・中学校の算数・数学教員からメールによる質問、相談を受け付け、それぞれ専門の立場から回答、アドバイスを行う。(附属学校)
2. 上記活動が、活発かつスムーズに行われるよう、コース教員と附属学校算数・数学教員との教育懇談会を行い自由な意見を交換する。(附属学校)
3. 現職数学教員も多く会員となっている学校数学研究会を学内で開催し、また機関誌を発行することにより、数学教育における問題提起・解決のための討議の場を提供する。(社会連携)
4. 教員支援講師・アドバイザー等の機会において、学校現場に実際の数学の楽しさや面白さを伝え、教師の資質の向上を図ると共に、生徒の数学離れ、学力低下を少しでも食い止める努力をする。(社会連携)
5. 小・中学生を対象とする「数学教室」を開催し、また開催が予想される鳴門市「子どものまちフェスティバル」において算数紹介コーナーを設けることにより、子供たちに数学に対する啓蒙や興味の惹起を行う。(社会連携)
6. JICA研修をコースで協力して行う。(国際協力)

2. 点検・評価

1. 附属小・中学校の算数・数学教員からメールによる質問、相談を受け付け、それぞれ専門の立場から回答、アドバイスを行った。また、附属中学校が文部科学省の指定を受けて行っている研究活動にコースの全教員が協力し、数学専門・数学教育双方の視点で助言を与えた。(附属学校)
2. 附属小・中学校との連携活動が、活発かつスムーズに行われるよう、コース教員と附属学校算数・数学教員との教育懇談会を行い、自由な意見交換を行った。(附属学校)
3. 学校数学研究会を8月27日に学内で開催した。またその機関誌を2回発行した。それらの活動により、数学教育における問題提起・解決のための討議の場を提供した。(社会連携)
4. コース教員全員が教員支援講師・アドバイザーに登録し、前期は3名が、後期は1名が教員支援講師・アドバイザー等事業の活動を行った。また、学校現場や教員研修会で講演や助言(計13回)を行い、数学の楽しさや面白さを伝え、教員の資質の向上を図ると共に、生徒の数学離れ、学力低下を少しでも食い止める努力を行った。(社会連携)
5. 小・中学生を対象とする「数学教室」を10月8日に開催した。また、鳴門市「子どものまちフェスティバル」が10月16日に開催された際には算数紹介コーナーを設け、子どもたちに数学に対する啓蒙や興味の惹起を行った。さらに、徳島県教育会が8月7日に開催した「徳島わくわく算数教室」の企画・実施にコースの全教員が協力し、地域の教育活動に貢献した。(社会連携)
6. JICAの委託事業である平成23年度地域別研修「大洋州地域における算数・数学教育に関する教授法の改善(教員対象)2011」をコースの全教員が協力して実施した。(国際協力)
7. 「平成23年度 附属中学校の生徒を対象にした授業支援」に係る「附属中学校 第2学年 数学科選択授業」(6回、12時間)をコースの全教員で協力・分担して担当した。(附属学校)

III. 本学への総合的貢献(特記事項)

1. 大学院において、自然系全体の定員に近い15名の入学者を確保し、コースとしての目標を大きく上回った。
2. 大多数の卒業生・修了生を教職に就かせることが出来た。公立・私立を合わせ正規採用は8名であった。
3. 徳島県教育会からの依頼を受け、徳島県教育会が8月7日に開催した「徳島わくわく算数教室」の企画・実施にコースの全教員が協力し、地域との連携を深めた。
4. 1件のJICA研修団をコースで受け入れた。
5. 附属中学校でのLFTの授業(1件)を担当した。
6. 「附属中学校 第2学年 数学科選択授業」(6回、12時間)をコースの全教員で協力・分担して担当した。